

〈研究ノート〉

山口県立大学への訪問交流会

The fellowship program with students of
Yamaguchi Prefectural University

堀後 達紀 (HORIGO Tatsuki)

松永 瞭太 (MATSUANAGA Ryota)

概要

2017年2月9日から2月11日の3日間、学生同士の交流と大学の取り組みを見学することを大きな目的として、山口県立大学（以下、県立大学）を訪れた。県立大学には、一昨年までの龍谷大学と同じく、「国際文化学部」が存在しており、「文化の交流・創造・発信のエキスパート」を育成することを目的としている（山口県立大学 a, 2016）。龍谷大学と県立大学の学生との交流は2015年度からはじまった。今回の交流会プログラムは、県立大学の国際文化学部の斉藤 理教授とゼミ生が計画したスケジュールによって行われた。今回のプログラムの目的は、動詞抽出調査法を用いて文化の伝えかたを考えることであった。また、国際文化学という学問をどのように捉え、社会課題に対してどのように学びを实践しているのかを、歴史的遺産の視察や修了生が営む店舗や工房の見学から読み解くことも大きな目的の1つとした。本報告書では、3日間に渡り行われた各日のプログラム概要と交流プログラムから学んだことを紹介する。

Abstract

This paper talks about the fellowship program held with students of Yamaguchi Prefectural University, at Yamaguchi Prefectural University between February 9 and February 11, 2017. Yamaguchi Prefectural University has a Faculty of Intercultural Communication (=Kokusaibunka-gakubu) as does Ryukoku University; which was until restructured in 2016. We participated in the program organized by Yamaguchi Prefectural University students. They adopted a method to create a “verb-pedia”. The purpose of this program is 1: To find out what Intercultural Communication is, through the method of verb-pedia. 2: To find a way to adapt them to encourage people, to improve social problems etc. with our own understandings about Intercultural Communication. In this paper the authors discuss the program schedules, and their findings and the insights gathered through this three day program.

はじめに

2017年2月9日（木）から2月11日（金）にかけて山口県にて龍谷大学国際文化学研究科と山口県立大学国際文化研究科および国際文化学部の学生と教員の交流事業が行われた。本学からは斎藤文彦教授の引率で、修士課程2年堀後達紀、1年松永瞭太（以下、龍大参加者）が参加した。

表1のプログラム内容は、県立大学の斎藤理教授とゼミ生によって準備・作成していただいた計画に沿って、まちあるきや意見交換を踏まえたワークショップを行った。

表1 プログラム一覧

2月9日（木）
午後
事前レクチャー
宮野地区まちあるき
見学（大和保男窯・木梨邸・寺内文庫）
宮野駅交流スペースにて懇親会
2月10日（金）
午前
大殿地区まちあるき
午前
鹿野地区にてまちあるき（積雪のため中止）
漢陽寺・二所山田神社・龍雲寺
コアプラザかのにてワークショップ
2月11日（土）
午前
山口県立大学にてワークショップ
総括

交流プログラム 1日目

今回の交流プログラムでは視察などを通して、文化を伝える動詞を抽出し各場所にとって最もふさわしい地域づくりの方法を考える取り組み（＝動詞抽出調査法）を行った。

県立大学がキャンパスを構える宮野地区にて、まちあるきを行った。「文化の眼鏡をかけて、一見何もない処から「場の力」を読み取る」ことを視察のテーマとし、県立大学の非常勤講師である北林健二氏の案内で大学周辺の歴史的遺産を視察した。ボーカロイドキャラクターとして一世を風靡した初音ミクと同名であることから聖地となった初音橋（一里塚橋）、全国的に姿を消しつつある沈下橋（図1）、造り酒屋跡や幕末期に江戸城の無血開城に貢献した木梨精一郎氏ゆかりの御邸である木梨邸などを実際に訪れた（山口県立大学b, 2016）。



図1 沈下橋にて説明を受ける参加者

宮野周辺の視察を通して、本学参加者は「知る」「行う」「PRする」「知る」などの動詞を抽出した。この動詞抽出調査法は、単に動詞を抽出するだけでなく自身の実体験などを踏まえ、各動詞を最も上手く活用する人やモノ、動詞が最も効果的に働く場面や対象なども同時に考えた。一例として、「行う」という動詞は、「ガイドツアーを行う」という動詞に変化する。今回の場合は、動詞の活用者も対象者も地元民である場合を意見として提示した。同じ境遇に身を置く者や、同じ地域で暮らしている者同士が情報を共有したり魅力を伝えあったりすることに地域づくりをより促進する可能性がある、と、実体験から考えたためである。このように、2日目も別地域にて動詞抽出を行いながら地域社会の歩んできた歴史と将来を考えた。

まちあるきの後は県立大学国際文化学研究科の学生主催の懇親会が行われ、宮野駅の駅舎を改装して作られた交流スペースにて、山口の名物であるかわらそばを堪能しながら親睦を深めた。

交流プログラム 2日目

午前中はかつて山口市の中心であった大殿地区にてまちあるきを行った。ここは町屋活用地区として登録されており、昔の町屋が残されている。またその町屋は中を改装し、店舗として活用されている。数件の町屋では県立大学国際文化学研究科の修了生が衣類や家具などを製作しながら、店舗を構えている。また「有限会社ナルナセバ」は約10年前の設立以来国際文化学研究科の学生が代表を務めており、研究と運営を並行して行っている。

午後は周南市鹿野地区に移動し、「漢陽寺」「龍雲寺」などの名所や街中を「秋吉台国際芸術村」在住の外国人アーティストとめぐる予定であったが、残念ながら近年まれにみる大雪（図2）のためアーティストと少し挨拶を交わすのみとなった。なお住民曰く「この大雪の日に来るのは宝くじの当選より難しい」とのことであった。

その後「鹿野地区コアプラザ」へと移動し、鹿野地区商工会議所や鹿野市区の振興に関わる住民より鹿野地区の変遷や現状の説明を受けた（図3）。



図2 雪に覆われる鹿野地区



図3 鹿野地区の説明を受ける本学参加者

鹿野地区も周南市の中山間地に位置し、鉱業や林業の衰退による人口減少に頭を悩ませている地区である。鹿野地区ならではの立地条件を活かし、高山植物や名産品によって外部からの観光客の獲得を模索している。なおワークショップの際に出していただいたカステラは、甘みが体にしみわたった。また、鹿野茶は茶葉を炒ることで生まれる独特の香ばしさが新鮮で、一般的なほうじ茶とはまた違った香りを楽しむことができた。どちらも地元で生産され、ガイドブックなどで案内され地域振興に一役買っている。

交流プログラム 最終日

最終日は県立大学のキャンパスへ両大学の交流会参加者が集まり、1日目、2日目のワークショップから考えた各地区に対する動詞を発表した。初めての取り組みということもあり、考案者の齊藤教授の助けを借りながらも「知る」「話す」「交流する」などの動詞を生み出すことができた。始終和気あいあいとした雰囲気、龍谷大学国際文化学研究科としての視点から考えたことを伝えることができた（図4）。



図4 交流の成果を発表する本学参加者

おわりに

最後に、今回の交流プログラムを受けての感想や気が付いた点を学生参加者の堀後と松永の両視点から述べる。

堀後

2015年度の研究発表会に続き、2016年度も参加した者として、「国際文化学研究科」と同じ名前であっても、準備されているカリキュラムや学生の研究内容の違いに大いに驚かされた。文献を研究するだけでなく自ら研究内容の現場に入り、活動している研究者が所属していることは、住民と一緒に活動することが多い筆者としては参考にするべき点であった。

また、プログラムで行ったフィールドワークでは、筆者の主な行動範囲である関西とまちのつくりや生活習慣が感覚的に違うと感じた。その違いを言語化することが非常に楽しく感じられた。和顔館の研究室に留まらず、山口の町や県立大学との違いを一度自身の目で見て、体で感じることをお勧めする。

松永

今回の交流プログラムは、昨年度のビデオ会議を使用した研究発表会に続く2年目の新たな取り組みであると聞いていた。今回は、山口県立大学では「国際文化学」という学問をどのように捉え、どのように実践しているのかを交流プログラムを通して考える機会となった。動詞抽出調査法という新しい研究方法に最初は戸惑ったが、この方法が「どうして」「どのように」地域づくりに活かされていくのかを考える過程を重視しているのではないかと感じた。この点は龍谷大学国際学部と似ている点であり、今回の取り組みを通して「考え、工夫すること」と同じ分野を専攻とする他大学の学生と交流し意見を交換することの重要性を学んだ。今回の取り組みをきっかけに、これからも

継続的に連絡を取り合うことができればと思う。

参考文献

山口県立大学 (2016a) 2017 年度山口県立大学案内

山口県立大学 (2016b) 山口県立大学「地域・大学連携による地域づくりをめざして～木梨邸の事例を中心に～」
<http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/contents/000040784.pdf> (最終確認 2017 年 2 月 13 日)